

姿勢保持の訓練

ことが多い。肩や首に過度の緊張がある。囁語のような発声や自分の手をかむ自傷行為がみられる。食事、排泄等については介助が必要である。

③ 養護・訓練指導上の課題

ア D男は、日常生活を仰臥位または腹臥位姿勢で過ごす。適切な補助をすることによって、不安定ではあるがあらゆる座位姿勢をとることができる。そこで、養護・訓練の指導では、他動的に身体の各部位の緊張と弛緩の学習を行い、筋活動の制御を活性化し、自己弛緩ができるようにすることが課題となる。

イ D男は、視覚や聴覚面に関しては特に問題はないが、がん具をなんとなくめめているといった行動を示

すことが多く、人から声をかけられても振り向くことはほとんどなかった。そこで、養護・訓練の指導では、興味や欲求を引き出し、行動の幅を広げ、D男が外界の事物に働きかけることができるよう援助することが課題となる。

ウ 日常生活に直接結びつけることができる排泄の欲求を指導者に知らせられるような技能の基礎を身につ

表4 D男の養護・訓練の課題と主な指導事項

課 題	主な指導事項
身体 の健康 (生活リズムの形成)	規則正しい生活リズムの形成を目指す。
心理的適応 (対人関係の形成)	人との関係を基盤とした情緒の安定を図る。
環境の認知 (感覚の活用)	能動的に環境へ働きかけられるよう援助する。
運動・動作 (姿勢、動作の基本的習得)	姿勢保持や移動など、身体の使い方の基本となる訓練を行う。
意思の伝達 (相互伝達の基本的能力の習得)	何らかの方法で援助を受けながら意思が伝えられるようにする。

④ 年間指導目標

ア 姿勢と運動・動作の基本を習得するために、肩や腰、脚などの部位を他動的に緊張と弛緩の学習を行い、自己弛緩を身につけさせ、能動的に周囲の環境へ働きかけることができるようにする。

イ D男自身の興味や欲求を引き出し、援助を受けながら「ひと」や「もの」に積極的に働きかけることができるようにする。

ウ 排泄の欲求を何らかの動作で援助を受けながら、指導者に知らせる

年間指導計画

学 期	1 学 期				2 学 期			3 学 期		
	4 月	5 月	6 月	7 月	8・9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月
身体 の健康 (生活リズムの形成)	学校の環境に慣らす。				日光浴、外気浴、水浴等で体力づくりをする。			保護服と履物の慣れを促す。		
心理的適応 (対人関係の形成)	自衛行為の軽減を図る。				欲求の充足を図り、情緒の安定を目指す。			人への興味・関心を育てる。		
環境の認知 (感覚の活用)	身体意識の形成を図る。				粗大運動に慣れ、楽しむ。			手の操作性の発達を促す。		
運動・動作 (姿勢、動作の基本的習得)	緊張と弛緩の学習				自己弛緩の援助			粗大姿勢の安定を図る。		
意思の伝達 (相互伝達の基本的能力の習得)	運動を伴った言葉かけに気づく。				言葉の中に示した行動を促す。			言葉による合図で行動させる。		
排泄指導 (定時排便の確立)	定時に座るに慣れさせる。				排便した時、何聲か出す。			排便時に声を出す。		

⑤ 須賀川養護学校(小学部)「養護・訓練」の時間の指導

《「気管支喘息児の管理と意欲の向上を図る指導」》

① 対象児童 E男 小学部五年

② 障害の状況及び生育歴 気管支喘息。正常出産。主たる養育者は祖母であった。幼稚園に入園後間もなく喘息発作が起こったが、程度は軽かった。生活面では、「落ち着いて人

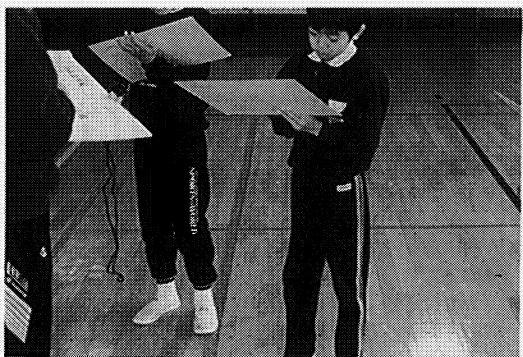
の話が聞けない」など注意散漫な面がみられた。

小学校入学後、二年生で喘息等による遅参十六日、欠席四十九日、そして、三年生になって発作が頻発し、入退院を繰り返す、六月の入院と同時に本校へ転入学となった。

家族構成は、両親、姉、弟、妹、祖母の七人暮らし。

③ 養護・訓練指導上の課題

ア 入院後、喘息発作の頻度は少なくなってきたが、風邪をひいたときや自宅に帰省したときに発作を起こすことが多い。心理的な緊張状態も誘因と考えられるので心理的適応が課題となる。



適度の運動と健康管理